



開業当時の帝国ホテル



「ライト館」と呼ばれた大正12年に建てられた帝国ホテル

歴史と伝統の中で…

帝国ホテル③



帝国ホテルが開業したのは今から百二十五年前の明治二十三年（一八九〇）のことである。長く続いた鎖国政策が改められ、外国からの賓客が訪れるようになった。しかし、その人たちを満足させるような宿泊施設が東京になかったため、日比谷の鹿鳴館の隣に建

てられたのが帝国ホテルである。

当時、東洋一の規模で木骨レンガ造りの地上三階。速くからフランス料理が取り入れられ「東洋の迎賓館」と呼ばれた。帝国ホテルは建設の経緯からしても、ただ利益だけを求めるホテルではなかったのである。

その後、外国人客はさらに増え、それに対応するために大正十二年（一九二三）に帝国ホテル新館が建てられた。この建物は二十世紀を代表するアメリカの建築家、フランク・ロイド・ライトが設計し、「ライト館」の愛称で親しまれて「東洋の宝石」とまで呼ばれた。ライト館開業当日の大正十三年（一九二四）九月一日、関東大震災が東京を襲った。ライト館は震災による被害がほとんどなく、そのことでも有名になったという。昨年正月明けに初めて帝国ホテルに泊まった時、ライト館開業九十年を記念し

た特別展示「東洋の宝石・ライト館」とその時代」が本館ロビー横で開催されていた。

今でこそ挙式から披露宴までのホテルウエディングは当たり前になったが、最初に始めたのはライト館である。また、ホテル内に日本初のショッピング・アーケードや、パイキング形式のレストランも同館である。

しかし、築後四十年がたつて老朽化が進んだため、昭和四十二年（一九六七）にライト館は解体され、その一部は愛知県「博物館・明治村」に移築保存されている。現在の本館が開業したのは昭和四十五年（一九七〇）、隣に地上三十一階のタワー館も増築されて現在に至っているが、まさに帝国ホテルは日本のホテルの歴史であり、そ

こから数々の伝統が生まれた。

現在、客室は千室近くあり、外国の賓客だけでなく我々庶民も泊まれる。美術館や歌舞伎座のようなものなら歴史と伝統を重んじていけばよい面もあるが、競争の激しいホテル業界はそれだけでは生き残れない。

その中で一流であり続ける帝国ホテルの魅力について次回、触れてみたい。



ライト館開業90年記念展示